

日本版クラインガルテンの展望

ドイツとの比較を通じて

The Prospects of the Kleingarten in Japan
Comparative study to Germany Kleingarten○妹尾亜希¹, 山中新太郎²*Aki Seno¹, Shintaro Yamanaka²

Kleingarten is a residence-type municipal farm that originated in Germany and has a hut where you can take a break. In this study, we compare Kleingarten in Germany and Japan. In this article, we will focus on the history of Kleingarten and the distance from home to Kleingarten. In the future, we will increase the number of comparison items and consider the future of Kleingarten in Japan.

1. はじめに

1-1. 研究の背景

現在、日本の人口減少・超高齢化は地方において自治体の消滅につながる問題とされている。その一方で、生活の場や活躍の場を地方に移す、あるいは都市と地方を移動しながら生活する二地域居住が広がりを見せており、潜在的需要が高いことが報告されている。二地域居住の中には、シェアハウスや別荘などの他にクラインガルテン(以後 KG と訳すこともある)がある。

クラインガルテンとは、市民農園の一区画ごとに休憩や簡易宿泊が可能な小屋(ラウベ)が設けられているドイツ発祥の滞在型市民農園のことである。市民農園は均等に区切った小さな区画内で行うため家庭菜園の域を出ないが、クラインガルテンは農業体験に加えて比較的安価に二地域居住や田舎暮らしを体験することができ、都市住民の週末利用や退職後の時間を楽しむ施設として注目を集めていた。

しかし、以前までは募集数よりも多くの応募数が集まるほど人気であったが、近年では空き区画が発生するクラインガルテンも多く見られる¹⁾。これは、現在のクラインガルテンの中心的な利用者層である60歳前後の世代の漸減による利用者の高齢化が生じている

ことや、新しいクラインガルテンが次々と開設されていったことによって供給が需要を上回ってしまったことなどが理由としてあげられる(Fig1, Fig2)。

1-2. 研究の目的

本研究では、クラインガルテンの発祥の地であるドイツと、現在の日本のクラインガルテンの比較を行い、日本のクラインガルテンの新たな形や今後の展望を探っていくことで、クラインガルテンの普及の一助とすることを目的とする。

1-3. 既往研究と本研究の位置づけ

クラインガルテンに関する研究については、牧山らがクラインガルテンの地理的分布¹⁾や費用対効果²⁾などクラインガルテンに関する多くの研究を行っている。また、津端³⁾や東⁴⁾がドイツのクラインガルテンと日本の市民農園に関する研究を行っているが、クラインガルテン導入を検討する時期の研究であった。それに対して、本研究ではクラインガルテン導入後のドイツと日本の比較をする研究である。

1-4. 研究の方法

ドイツと日本のクラインガルテンについて、文献調査やインターネットを用いた調査を行う。さらに、関東と長野県松本市に位置するクラインガルテンで現地調査を行い、ヒアリング内容をもとに研究を行う。

2. ドイツと日本のクラインガルテン

2-1. 歴史

ドイツでは、1864年にシュレバー医師が、ドイツ東部のライプツィヒに最初のクラインガルテン協会を設立した。これは、工業化が進む社会の中で人々が土に親しむことによって健康を回復すること、とくに子供たちに自然にふれあう機会を与えることを目的とした一種の社会運動として発足した⁵⁾。その後、1919年にクラインガルテン法が誕生し、国全体で開発が行われ

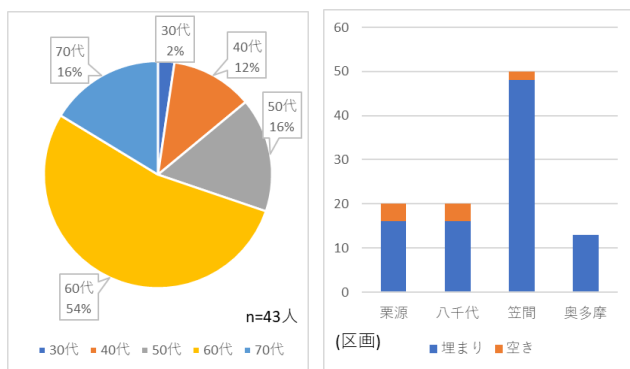


Fig. 1 笠間 KG 利用者層

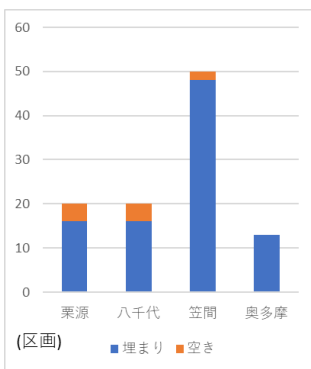


Fig. 2 区画数と空き区画数

た³⁾。現在も、ドイツでクラインガルテンは多く使用されているが、利用目的は「自然に親しむため」や「植物が好きだから」⁵⁾など、時代にあわせて目的は変化していることが分かる。

日本では、1926年に大阪市農会によって、1933年に東京市農会によって市民農園が開園した。これらの市民農園の開設には、ドイツのクラインガルテンが設計や運営に大きな影響を与えたとされている⁶⁾。1993年に国内最初のクラインガルテンである坊主山クラインガルテンが開設されてから、多くのクラインガルテンが開設され、農林水産省のデータでは滞在型市民農園が66カ所存在している⁷⁾。日本のクラインガルテンの多くが、遊休荒廃地の整備や、田舎に都市住民を呼び込むことを目的として開設をしており、利用者の目的は、「自然の中で暮らしたい」や「農業がしたい」などである。

2-2. 距離と移動時間

ドイツでは、利用者の約半数が徒歩か自転車で気軽に通える距離に住んでいる。利用者は居住する行政区のクラインガルテナー協会が管理するクラインガルテンを利用し、基本的には所在するクラインガルテンから5km~10kmの居住者が対象である⁸⁾。ドイツでは都心の集合住宅の近隣にクラインガルテンが集中している様子が見られる (Fig3)。

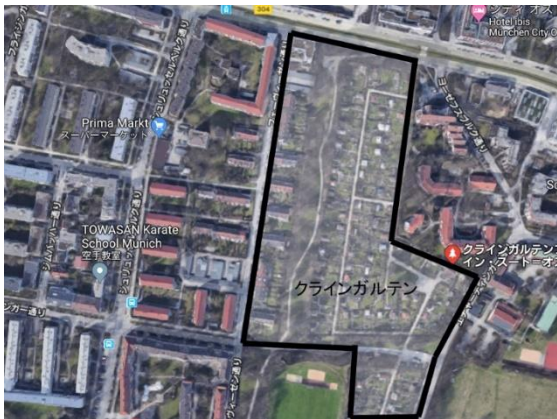


Fig. 3 ミュンヘンのクラインガルテン⁹⁾

一方で、日本では都心から車で数時間かけてクラインガルテンに通うのが一般的である。Fig4より、農林水産省のデータの中から、東京都港区から移動時間4時間以内で通うことのできる32カ所のクラインガルテンのうち、1時間以内で通えるクラインガルテンは無く、2時間以内で通えるものが6カ所、2~3時間以内で通えるものが8カ所、3~4時間以内で通えるものが18カ所であった。このように、都心部から距離が離れているため容易に利用しづらいという点がある。特に、現役で働いている若い世代の人々はなかなか手が出せないであろう。茨城県や長野県のクラインガルテ

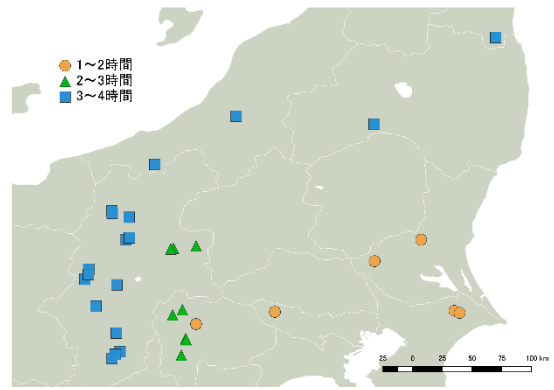


Fig. 4 東京からクラインガルテンまでの移動時間¹⁰⁾
 ン管理者へのヒアリングによると、現在の日本のクラインガルテンは距離の遠さを埋め合わせるように地方ならではの土地の特徴や魅力をPRの一つとしている。長野県松本市にある5つのクラインガルテンでは、アルプス山脈に近いので、山や登山が好きな人を利用者として獲得している。

3. まとめと展望

二つの比較から、日本のクラインガルテンが「農業を広める」のではなく、「田舎に人を呼ぶ」ということを目的としているため地方に分布していることがわかる。今後クラインガルテンを広めて地方に人を呼ぶためには、都市居住者に対する農業への関心を高める工夫が必要である。

ドイツと日本のクラインガルテンは、1区画内の畑とラウベの関係や面積は共通しているが、1地域の区画の数は異なる。また、利用料金や利用計画、土地の種類や都市計画的要素など異なる点は多くあるため、ドイツと日本のクラインガルテンの比較を進めていき、今後の日本のクラインガルテンの展望について考える。

【参考文献】

- 1) 牧山正男・細谷典史・井上真美：滞在型市民農園およびその区画の地理的分布—特に空き区画の現状および新設計画に注目して—, 農村計画学会誌 32 巻論文特集号, 2013 年
- 2) 後澤慧・牧正男・高橋孝明：滞在型市民農園の費用対効果分析, 農村計画学会誌 29 巻論文特集, 2010 年
- 3) 津端修一：日本版・クラインガルテンを考える, 農村計画学会誌 2 巻 1 号, 1983 年
- 4) 東廉：都市近郊におけるもう一つの緑地計画—日本においてクラインガルテンは可能か—, 農村計画学会誌 6 巻 4 号, 1988 年
- 5) 平智：ドイツのクラインガルテンに見る人と園芸作物との関わり, 人間・植物関係学会雑誌 6(1), 2006 年
- 6) 工藤豊：わが国における市民農園の史的展開とその公共性, 日本建築学会計画系論文集 74 巻 643 号, 2009 年
- 7) 農林水産省ホームページ
http://www.maff.go.jp/j/nousin/nougyou/simin_noen/s_list/index.html, 2019 年 8 月 22 日閲覧
- 8) 兵庫県議会ひょうご県民連合議員団ホームページ
<http://www.hyogo-kenminrengo.jp/?p=1378>, 2019 年 9 月 23 日閲覧
- 9) Google Maps より作成
- 10) 農林水産省ホームページより各々のクラインガルテンのホームページを引用して作成